

## 細い目で遠いところを

竹内道雄

昭和四十九年の七月から二年半、大平さんが大蔵大臣をしておられた間、私は主計局長として一年、あと一年半を次官としてお仕えしました。第一次石油危機の余波を受けて、物価上昇はやまず、しかも不況はなかなか回復しない、企業収益の悪化によって租税収入は激減し、大量の赤字国債の発行を余儀なくされるという異常な時期でした。景気の回復と物価の鎮静、財政の再建、この三つの命題を抱えて大蔵省が苦勞している時代でした。

そういう時期ですから、絶えず厄介な問題が起きてくるのですが、大平大臣の落着いた様子はいつも私達に一種の安心感を与えてくれました。大臣は、自分が出て始末する問題と部下に任せる問題とをどこかで区別しておられたようです。案件をぶらさげて大臣室にご相談に行くと、事柄によっては、「お前さんは悪い奴だから何か考えているだろう」と、十分相手にしてくれませんが、こちらも、それでは何とか皆で智恵を出して大臣に迷惑かけないように解決しなければという気持になったものです。余談ですが、だいたい大平さんは、私のことを竹内君と呼んだり、お前さんといったりしましたが、竹内君の時は、比較的に事務的であり問題が少ない。お前さんの時は、何らかの意味で含みがある、要警戒と考えて間違いないなかつたように思います。

ところで、大平大臣の時には、公定歩合を下げたいのだが、郵政省が郵貯の金利の引下げを渋るので事が進まないということがありました。この時、大平大臣は、「道路の向う側まで行って、俺が直接郵政大臣に話してこよう」といい出されました。およそ大蔵大臣が郵政省に自ら出向くというのは、前代未聞のことでした。結局そ

のことは実現して、もちろん公定歩合も郵貯金利も下がりましたが、この際、景気回復のためにそれが必要なら、恰好などに構ってられないというのが大臣のお気持だったのでしょう。

また、大量の国債を消化するため、国債の種類が多様化を図ろうとの趣旨で、中期割引債の発行が企画された時、金融機関の反対でその実現が危ぶまれたことがありました。しかし、事態がある段階までくると、大臣は、「ここまでできたら、ドント・ヘジテイトだ」と私達を激励されました。中期債は誕生しました。大平さんは、事を決するのに、方向と同時にタイミングをたいへん重要視されていたと思います。

大蔵大臣をやめられてからもお目にかかる機会はありませんでしたが、昨年の五月二十七日、華国鋒首相を招いた宮中晩餐会の折に、大平総理にご挨拶すると、「お前さん、どこかへ出かけるんだって」といわれました。「東南アジアに行つてまいります」「そうか」と何か考えておられるような具合でしたが、思えば、それが大平さんとお話をした最後になつてしまいました。

それから数日後に大平さんは倒れられ、六月五日に成田を発つた私は、シンガポールでご逝去の報せを聞くこととなりました。十二日、北スマトラのメダンの日本領事館で弔問の記帳をいたしました。

たしか幹事長をしておられた時のことだったと記憶します。その時大平さんは、「お前さん、代議士になる気があるかい」と聞かれました。「ありません」とお答えすると、「そりゃよかった。やめておけよ。俺もはずみで国会に出て、ここまでできてしまったが、この仕事をはじめると、死ぬまでやめるわけに行かない。好きな本もろくに読めないんだ」と、あの細い目で遠いところを「覧になるふうでした。その後は、その話は一度もされませんでした。逝くなられるまでに、どこかで思い切りゆっくりと、俗事を忘れて本を読んだり、「ゴルフをしたり、好きなことを心おきなくやっていた良かったとつくづく思います。

(日本輸出入銀行総裁)